

## 自販機センチメートル

岐阜北高校 3年 浅野 七星

「身長いくつ？」

「ひゃくはちじゅう、さんやね」

「ふーん、自販機といっしょやね」

いっしょに勉強しようよ、と君を連れ出した、あつたかい春の日。私はキミに呪いをかけた。あくまで、自然に。ふと、思いついたように。

うまく言えただろうか。ぜんぜん興味なんか無いフリしてそっけなく。何ヶ月も前にキミが自慢げに見せてきた体力テストの用紙。そのはじっこに書いてあった身長を、さも初めて知ったように取り繕って。私は数学嫌いだし、記憶力もあんまりだけど、なぜだかこの数字だけはスツと入ってきたし、ずつと消えてくれない。受験生の身としては、こんなの覚えてるメモリがあるなら、酸化剤と還元剤とか、気候区分とかで上書き保存したいんだけど。

私はいつも彼を見上げる。二十八センチメートル、私より空に近いキミは、私が見えない景色を見ている。どんな世界なんだろう。キミに連れ出してもらいたい、なんてね。

私はもうすぐ高校三年生。ここで少し、私たち、というか私の一方的なもだをお話ししたい。

はじめは、背高いな、くらいしか思わなかった。

同じクラスになって、私の右斜め前が彼の席だった。面白いと思った。彼の独特な雰囲気。素敵だと思った。知的好奇心に溢れるその横顔を。もつと仲良くなりたくなつた。あんまり人と深く関わらない私だけど、踏み出してみようと思った。ある日の席替えで、なんと隣の席になった。彼があまりにも私と自然に話すから拍子抜けした。金曜日に席が決まって、月曜日に新天地に移るまでの間、私はものすごく緊張していたのに。

それが夏休みに入るちょっと前の話。授業中以外はあんまり話さなくて、でも授業で時々あるペアワークは結構盛り上がった。なんとか好意的に思ってたほしくって、キミを笑わせようと毎回気を張っていたから、「となりの子と話し合って」ってフリーズに、毎回心臓がぎゅつとした。私の頭は常にフル回転。考えすぎて空回ることたくさんあったけど、彼はいつも笑って受け止めてくれた。声が小さい私は、「なんて？」って友達に聞き返されることがよくある。わたしはそれがどうしてもチクツとして、いつも「うん、なんでもない」って呑み込む。ひとつ喋るのにかかるエネルギーが人より大きくなって、それが空ぶるショックが大きいほうだと思う。だけどキミはいつも私の言葉を拾

つてくれる。彼と話す時間はあったかくて、楽しくて、それでいてちょっぴりピリツと緊張のスパイスもある。初めての感覚だった。

どこかに誘う勇氣もなくて、そんな親密度もなくて、とりあえず夏休みの間は淡い気持ちを透明な水に溶かした。なんとなんと夏休み明けの席替えも隣だった。でもたいして仲は進展しなくて、そのまま。たまに目があって微笑を讃えあうような、なんともいえぬ生温い関係が続けた。なんだか間延びした関係が妙に心地よくて、ピシヤリと水を打つことはできなかった。だから、冬休みも雪で覆った。想いだけ、はらはらと募っていた。

あつという間に春休み。クラスが変わってしまふ。このままじゃいられないから、きつと後悔するから、「余計なことではしすぎる方がいい」ってスピッツが言っていたから。逸る心臓をどうにか抑えて、なけなしの勇氣を握りしめて。トーク画面を開くのに十分、打つのに十分、送るのに三十分。

「メデイコスで勉強しよ」

「いいよ」

返信は三時間後だった。跳び上がるほど嬉しかった。それと、やっぱり、と肩の力が抜ける感覚もした。私の約一年の集大成を、彼はたつた三文字でさらりとかわした。その三文字でぜんぶわかる。私にとってキミは唯一の仲のいい異性だし、誰より話していい楽しい、特別な存在にまで上り詰めた。けれどキミにとっての私は、数多の友達の中の一人に過ぎなくて。互いに向ける矢印の大きさも、重さも、方向も、ぜんぜん違ふ。最初で最後にしよう。そう決めた。彼の受験勉強の邪魔もよくないし、私も勉強しなきゃいけないし、なんかそんなに好きじゃない気がしてきたし。誰に言い訳しているのか。他でもない自分だ。これ以上期待して、傷付きたくない。それが本音だった。

ところでキミと私、なんだか不平等じゃない？私はこのようにキミのことを考えているのに。

だから、自販機を見るたびに、思い出せばいいと思うの。一生、ずっと、たとえこの街を出たって、この国を出たって、私のことなんか忘れたって。それは付き纏うのだから。世界中にあるのだから。私が自販機で、キミも自販機で。私はいつもキミを見ることができる。どこへ行ったらって。

「そうなんや、知らなかった」

なんて呑気にいうキミは、私のこんな仄暗い一面を見ることもない。ふっと放った呪いになんか気づかない。いい気味ね。

街中で、あ、俺とおなじだっけ。

なんてふと思ったりして。そんな風に彼の中に私が生き続けている。素敵な復讐でしよう？

だけどね。机に向かう彼の横顔を見ながら思う。とつくに目の前の数式に夢中だ。私の逡巡を凝縮した呪いの言葉は、もう彼の脳内で希釈されちゃってる。

でも、いいの。もしかしたらキミがいつか、何年後、何十年後に、自販機を見てふと、私のことを思い出す。そんな一縷の可能性だけで、私は、この恋心を甘やかしてゆけるのだから。